

■編集・発行 NPO法人 大谷石研究会

〒321-0345 栃木県宇都宮市大谷町1249  
 (株式会社とちぎテラス内)  
 TEL028-678-2720 FAX028-678-2740  
 http://www.ooyaishi.org/  
 mail:info@ooyaishi.org

編集責任者 佐藤 公紀

大谷石研究会では、会員の募集をしています!

入会の資格は、年齢、性別、職業、地域を問いません。  
 「大谷石が好きだ!」という事だけです。  
 現在、20代から80代の約120名の会員がいます。  
 年会費は個人会員4,000円、特別会員10,000円です。  
 入会希望者は、左記の事務局へ問い合わせ下さい。



「大谷深堀り再発見ツアー」に参加して

NPO法人大谷石研究会 会員 久宮 強  
 (株式会社フクダアンドパートナーズ)

11月15日(土)、大谷石研究会の研修見学会「大谷深堀り再発見ツアー」に参加しました。朝7時に草加を出発しましたが、浦和インターや久喜ジャンクションでの事故渋滞により集合時間に間に合わず、「小野口家住宅」の長屋門前から合流しました。

最初に訪れた小野口家住宅は、江戸時代から続く名主の旧家で、6棟の大谷石造建築と200mに及ぶ石塀を備えた豪農屋敷です。国登録有形文化財に指定されており、奥様の案内で敷地内を拝見しました。酒蔵に残る明治時代の酒樽には酒税印紙が貼られており、会員の博識による解説に一同感心しました。

その後は徒歩で地域を巡り、大久保石材店石室、屏風岩石蔵、渡辺家石蔵・薬医門などを訪ねました。石材店や石蔵、薬医門

が連続して現れる景観は、まさに「石の街・宇都宮」の歴史を凝縮した散策道であり、今後の整備によって文化的価値がさらに高まることを実感しました。最後に谷口勇三先生の工房「アトリエ陶遊舎」を訪れ、庭に並ぶ陶器やオブジェを眺めて午前の行程を終えました。

午後は、大谷石採石場跡「洞窟X」の特別公開に参加しました。約100年間眠っていた非公開の地下空間で、手掘り時代の採石跡を間近に体験。ツルハシで石を4000回打ち込んで1本の石を切り出した痕跡が残り、実際にツルハシを打ち込む体験も行いました。暗闇をヘッドライトで進むと、切り残された石や岩肌が幻想的に浮かび上がり、採石場跡の迫力を肌で感じることができました。

今回の研修会ツアーは、石材業の実用、豪商の象徴、文化財としての保存が連続して現れる「大谷石文化の縮図」を体感する機会となりました。石の街・宇都宮の歴史と美意識を散策し、採石文化の奥深さとともに、戦争の記憶を伝える地下軍需工場の痕跡にも触れることができました。まさに「大谷深堀り再発見」の名にふさわしい研修会でした。



会員紹介

大谷石の魅力と研究

NPO法人大谷石研究会 会員 安高 尚毅(あたかなおき)  
 (小山工業高等専門学校 建築学科教授)



私は、日本建築史・都市史を専門とし、近世を中心に、建築や都市がどのように歴史的・社会的背景のもとで形づくられてきたのかを明らかにする研究を行っています。また、コンピュータを用いた復元設計にも取り組み、地域の歴史的景観を視覚的に再現することを試んでいます。大谷石との出会いは学生時代、フランク・ロイド・ライトの建築を学んだときにさかのぼります。九州出身の私にとって、「おおやいし」なのか「おおたにいし」なのかも分からないほど遠い存在でしたが、関東に移り、その独特の風合いと地域文化との結びつきに強く魅了されました。小林先生のお誘いをきっかけに本研究会へ入会し、昨年度は徳次郎宿・小日野屋の実測調査に参加、その成果を2025年度の日本建築学会大会で報告させていただきました。これまで、結城・宇都宮・古河など北関東の城下町を対象に都

市史研究を進める一方、小山市や下野市の寺社建築、彫刻、大谷石を用いた農業倉庫の調査にも取り組んでいます。今後は、大谷石建物の実測調査を通じて、集落や建築がどのように歴史的に形づくられてきたのかを多角的に探っていきたいと考えています。歴史的環境を時代・哲学・技術の側面から読み解き、大谷石を中心とした栃木県の建築文化の形成を明らかにすることを目指すとともに、研究成果を地域社会に還元し、持続可能な観光やまちづくりのあり方を考えていきたいと思えます。北関東にはまだ知られざる大谷石建築が多く残されています。それらの歴史を丹念に読み解き、新たな地域像を提示することで、次世代へとつなげていければ幸いです。今後ともどうぞよろしくお願いたします。